*Bulletin of the School of Education,*
*Nagoya University (Educational Psychology)*
*1996, Vol. 43, 1 − 21.*

# 誌上シンポジウム

# 外発的動機づけと内発的動機づけの間

## 企 画 の 意 図

名古屋大学：速　水　敏　彦

本紀要，第三回目の誌上シンポジウムは「動機づけ」の問題を取り上げることにした。「動機づけ」は教育心理学，学習心理学あるいは社会心理学など，様々な心理学の領域で扱われているが，まだ周辺的位置しか占めていない，理論的にも未熟な分野のように思われる。しかし，最近，特に教育心理学研究などには若い研究者たちが次々と新しい研究を発表しており，今後の発展の息吹が強く感じられる分野でもある。

その分野に今一つの異変が起きている。

教育心理学会でのこの分野の発展の旗印となったのはまちがいなく「内発的動機づけ」という言葉であろう。多くの教育心理学者たちは現場の教師やこれから教師になろうとする人たちに「外発的動機づけ」はやめて子どもたちの「内発的動機づけ」を喚起しようと声高に叫んできた。しかし，この2つの動機づけの概念はそれほど対立的なものなのだろうか。どこかで重なり，支え合い，統合されるものではないのかという疑問が提出され出したのである。この新しい考え方は，場合によっては教師になろうとする人たちが学ぶ教育心理学の教科書さえ書き改めねばならぬほどの大きな問題を含んでいる。

そこで「外発的動機づけと内発的動機づけの間」と題して誌上シンポジウムを企画することにした。外発的動機づけと内発的動機づけという概念区分はどのように考えたらよいのか，両者はどのように相互に関係すると考えられるのかというような視点から，長く動機づけの問題に関わってこられた3名の先生方に縦横無尽に論じていただくようお願いした。

表題に「間」という言葉を使ったのは新しい考え方では両者は隔離せず，連続線上にあるという立場を企画者がとっているからである。また「外発的動機づけ」を先に「内発的動機づけ」を後においたのは外発的動機づけにより内発的動機づけが形成されていくことが想定されているためである。

最後に本シンポジウムの話題提供者について少し紹介させていただくと，まず，明治大学の倉八順子氏は英語の教授法，特に最近のコミュニカティブ・アプローチについて学習意欲という側面に焦点をあてて研究されている。代表的な論文として「コミュニカティブ・アプローチにおける規則教授が学習成果及び学習意欲に及ぼす効果」（教育心理学研究，42巻1号）がある。琉球大学の前原武子氏は教育心理学や発達心理学を専門にしておられ「教育心理学 ―コンピテンスを育てる―」（福村出版）や，「生涯発達―人間のしなやかさ」（ナカニシヤ出版）などの著書がある。京都女子大学の北尾倫彦氏は教育心理学会の重鎮の一人であり，紹介するまでもないが自己教育力という概念を学校教育に理論的裏付けをもって投入された方であり，また，関心・意欲・態度を重視するいわゆる「新しい学力観」導入の仕掛け人でもある。